

高山彦九郎は太田が生んだ江戸時代の偉大な尊王思想家であり、幕末の志士達に多くの影響を与え、明治維新を導いた先駆者ですがその活躍の場が主に京都や九州などであったこともあり、地元への関心は比較的薄いものがあるようです。また、彦九郎は北海道及び四国を除くほぼ日本全国を精力的に回った偉大な旅行家でもあり、その旅日記は紀行文を中心に、各地の生活・民俗・風土などの社会状況、及び外国船来航・棄捐令・寛政異学の禁止などの政治状況の風聞や、忠義・孝行・節婦などの伝聞、さらには多くの知人との交流の数々を膨大な旅日記にまとめ、後世に伝えた優れた社会活動家でもあります。

その彦九郎が31歳の安永7年(1778年)5月14日に尾島を遊行した貴重な記事が残されています。この記事は、旅中記の多い彼の日記中珍しく郷里にいて墓参・小旅行等のほかは家庭での生活などを記したもので『戊戌季春記事』の題名がついています。以下にその該当部分を現代風に紹介します。なお下の枠内に原文を載せておきますのでご参照ください。

『5月14日夕刻、細谷を出て米沢の庚申塚附近の小川の土橋辺りに着く。細谷の自宅は北北東にあたる。石田川の北側の田島村を西に行き、山王の社(下田島の日吉神社)に着く。鳥居の前には直径80cm位の銀杏の木があり、拝殿は間口三間、宮殿は壱間で玉垣ある、社の後には太さ1m位の松や杉の大木がある。さらに南へ100m位行くと道の左に二間余りの池のようなものがある、山王の御手洗と云う。次に石田川に懸かっている土橋を渡り100mほど

で裏尾島である。さらに西へゆくと諏訪神社が右にある。尾島の本通りに出て右へ行くと哀愍寺があり、山門もある。なお西へ行くと右に天王の社(須賀神社)がある。次に東光寺と云う小さい寺がある、前にお堂及び唐金の仏がある。尾島宿を西へ出て右に諏訪神社(亀岡神社)がある。これよりなお畑の中を西へ行き、左に軽浜(亀岡の小字)を見て過ぎる。安養寺村の不動堂に至る、堂の大きさは横四間に縦五間余で南向きである。東に石の千体仏(国道354号沿いにあり尾島のピラミッドと異名がある)がある、常燈明堂はその前に有り、鐘付き堂もあり門もある。西に明王院の寺が有り。南は大館村、西は出塚村である。帰り道に尾島宿の銭屋酒店で酒を飲む。

主人らしき人に所々への行程を尋ねると主人が答えて曰く、「小泉へ10Km、館林へは20Kmでそれぞれ東方である。太田へは7Km北東である。熊谷へは16Km、前橋へは28Kmである。」しばらくして酒店を出て中沢の店で扇子1本を買う。

主人が私を覚えていて、「寺小屋時代の我らの友達も今は離れ離れとなったり或は死んだ友もいる」と話をする。私は「今在る方へは良く言って細谷へ尋ねて来るよう」と伝言して店を出る。祖母へ土産の為に酒のみ茶碗を買う。東へ出て左の方雷電神社(尾島一丁目)へ寄る。尾島の市は五・十のつく日に開かれ出店数は凡そ百八十店で裏尾島を含めて約二百店である。夜に入った頃、米沢の岩崎老人宅へ寄る。[中略]午後10時頃に細谷へ帰る。』

十四日、晴天也、[中略]晩景に至りて我レ西南の村里に遊行す。先ツ田間を経て米沢庚申の壺丁斗り西の圪橋の辺りへ出ツ、是レより宅へ子丑の間へ当る、是レより西南へ行き岩松の橋の辺りへ出で、こなたより西へ入りて酉戌の方へ行きて田島金なくそへ至る也、また西へ至りて山王也社南に向ふ。鳥井の前右にいてうの壺かい半斗りなる有り、拝殿三間宮殿壺間玉垣あり、社後松杉共に二かい斗りなる有り、南へ壺丁余行きて道の左りに二間余の他の如くなるあり山王のみだらしと号す、圪橋を渡りて壺丁斗りにしてうら尾島なり、是レより西へ行きて諏訪の社右にあり、尾島宿中程に出で、右へ行きてあいめん寺山門あり、猶西へ行きて右に天王の社次に東光寺とて小寺あり、前に堂及びひかな仏あり、宿を西へ出て右に諏訪の社有り、是より猶畑地を西へ行き左りに軽浜を見て過ぐ、安養寺村不動堂に至る、堂の大サ横四間に五間余有り南向き也、東に石の千体仏あり常燈明堂は前に有り鐘堂もあり門あり西に別当明王院の寺有り、南は大館村、西は出塚也、帰へるとて尾島宿銭屋酒店に飲酒し侍る。主しと覚しきに所々への行程を問ふ、答えて日夕、小泉へ二里半館林へ五里各東也、太田へ壺里三十丁良也、熊谷へは四里前橋へは七里となん、しばらくにして出て中沢が所にて扇子壺本を求め侍る、主し我レを覚へて語る、手習の時の朋友も今は離散し、或は死しなとせしよし也。今在る方へは克ク言ひて細谷へ尋ぬへしと伝言し出ツ、祖母公へ土産の為メ酒のみ茶碗を調へ侍る、東へ出て、左りの方雷電の社へ寄る。尾島の市店凡ソ百八十裏迄かけて二百に満たすとぞ。時に夜なり。米沢岩崎老人へ寄る。[中略]四ツ時分に細谷へ帰へる、